〈長崎原爆資料館〉

体験的継承から対話的継承へ

深谷直弘

名称
長崎原爆資料館

設置者・管理者
長崎市
※2019年9月から来館者への案内や警備、駐車場管理などの維持管理業務は、指定管理者長崎平和施設管理グループ（代表：株式会社司コーポレーション）に。

開館年
1996年

住所
〒852-8117　長崎県長崎市平野町7-8

電話番号
095-844-1231

アドレス
http://www.city.nagasaki.lg.jp/peace/

開館時間
8:30 ～ 17:30（入館は17:00まで）、5 ～ 8月は18:30まで（入館は18:00まで）、8月7日～ 9日は20:00まで（入館は19:30まで）

休館日
年末（12/29 ～ 31）

入館料
大人200（160）円、小中高生100（80）円
※（　）内は15名以上の団体割引料金

一、長崎原爆資料館と展示のインパクト・生々しさ

長崎原爆資料館（以下、原爆資料館）は、一九九六年に開館し、毎年約七〇万人前後の人が訪れている（二〇一八年度は六八万人）。原爆資料館が開館するまで原爆被害を示すモノなどの展示は長崎国際文化会館（以下、国際文化会館）と呼ばれる建物で行われていた。戦後、こうした資料を最初に展示したのは、その前身の長崎市原爆資料館（通称、六角堂）である。この館は一九四九年五月に現在の爆心地公園内に建設され、一九五五年の国際文化会館開館までの間その役目を担った（長崎市被爆継承課編、二〇一六、三七頁）。市原爆資料館時代を含めると、長崎原爆に関する展示は七〇年以上行われていることになる。

しかし原爆資料館では、開館前後に大幅にリニューアルした展示内容が、国際問題にまで発展している。これは、一五年戦争におけるアジア侵略といった加害行為に関する事柄を展示することの是非が問われたもので、「長崎原爆資料館加害展示論争」と呼ばれた[1]。ただそれよりも問題であったのは、来館者から原爆資料館の展示が整然とし過ぎている、生々しさがない、インパクトがないという不満の声が聞かれたことである[2]。加害展示論争が収束すると、原爆資料館全体が原爆の記憶を伝える上で適切な展示となっているのかについて検討する会議が開かれた。そこでも国際文化会館の展示と比較して、委員から「厳粛さが感じられない」、「原爆被爆の実態に迫る展示になるように工夫してほしい」という発言があり、原爆資料館での展示の物足りなさが指摘された（「第四回長崎原爆資料館運営協議会議事録」一九九六年一一月一日）[3]。これは、この委員の発言だけではない。原爆資料館に関する企画記事において、ある被爆者は国際文化会館と原爆資料館の展示を較べて「（旧館は）血にまみれた白衣がそのまま置かれていた。触ろうとしても触ることができない迫力があり、それが原爆の恐ろしさ。［原爆資料館には］映像世代の子どもたちがリアリティーを持てる工夫をしてほしい」と述べている（『長崎新聞』二〇〇六年四月二八日）。

長崎平和推進協会が二〇〇四年一月から二月までに行った来館者へのアンケート調査でも同様の感想が見受けられる（長崎原爆資料館、二〇〇五）。

スマートな展示の感がする。……生々しい、悲惨さがあっても良いのでは……

（二〇〇四年一月二〇日）

以前の資料を見て修学旅行生（六回）と泣いて理解していた原爆、何か美術館にいる気分でした。もっと事実の資料を見せてほしい一念。

（二〇〇四年二月四日）

あまりにもきれいに資料がみがかれて、ハクリョク（当時の）がなくなっていました。……原爆のおそろしさを伝える（見る人が感じてくれたか？）ことができるかと思った。

（二〇〇四年二月四日）

被爆2世としては、とても悲しい。……以前より展示数が減ったのはどうして……初めての人へは訴える力が弱いのではないでしょうか。

（二〇〇四年二月二八日）

以前に比べて、ソフトなつくりになったと思う。小学生の時に見たほうがショックが大きかった。今はこれでいいのかと思う？

（二〇〇四年二月二九日）

これらの感想には、展示に生々しさ、それに付随する迫力や衝撃が足りないことが述べられている。では

なぜ、こうした意見が聞かれたのか。本論では、原爆資料館展示の特徴を踏まえた上で、国際文化会館時代と原爆資料館時代の展示空間の変遷や展示方針とを比較し、その物足りなさの正体を明らかにする。さらにこれらの検討を踏まえ、原爆を伝える博物館の役割の変化についても言及する[4]。

二、長崎原爆資料館展示の特徴

ここでは、原爆資料館の展示がどのような特徴を持っているのかを確認する[5]。原爆資料館は「歴史的・科学的説明」と「被害を明示し印象づけるモノの提示」というふたつの展示形態が共存しており、そのうち後者は「残酷さ・残虐さ」と「共感」を喚起させる機能を持つ。

「歴史的・科学的説明」は教科書的に説明されたパネルなどである。たとえば、「原爆による火災の検証」では、火災状況を被害の大きさを科学的に検証した内容が説明されている。さらに「長崎原爆投下までの経過」では「……原爆は8月6日にテニアン島で組み立てられ、……小倉を第1目標、長崎を第2目標として……9日、B29ボックス・カーは小倉上空に達したが……投下を断念、第2目標の長崎に向かい、……原爆を投下した」という形で歴史的経緯が、史的事実（年表に書かれるような内容）として述べられている。

こうした「歴史的・科学的説明」は、見る者の素朴な疑問に答える基礎知識として提示されている。そうすることで、原爆投下という出来事を説明可能で、理解可能な事実として描く効果をもつ。

「被害を明示し印象づけるモノの提示」は、原爆投下の傷跡が残っているモノ、原爆投下直後の様子を写した写真、さらに証言パネル、証言ビデオなどの展示を指す。

そのなかで遺品や人体の一部を提示し、キャプションには持ち主の名前と被爆時のエピソードが語られている展示がある。ここでいうエピソードとは、登場人物が特定され、さらにその人物の時間経過、その間の変化が記述されているものである。

例えば、「幼児の服」には以下のようなキャプションが付けられている。

> 爆心地より約1・1㎞、竹の久保町の淵国民学校裏付近で生後8か月の幼児が被爆死した時着ていたもの。背面は焦げてぼろぼろになっており、生き残った母親が形見として25年間持っていたものである。

ここでは、原爆被害を受けたモノを展示するだけでなく、その持ち主を示し、その人がどのような運命をたどったのか、そしてそのモノが家族によっていかに引き継がれたのかが説明されている。これにより、「服」は誰のものかわからない被爆の痕跡ではなくなり、ある個人が突然被った異常な出来事を示すことになる。そして、当時の被爆した人たちの体験を身近に感じさせ、その無念さや家族の悲しみを想像させるのである。

他に「手の骨とガラス」といった、身体の一部を展示しているものもある（長崎市、一九九六＝二〇〇四、二三頁）。キャプションによればその展示品は、爆心地付近で発見され、人間の手の骨とガラスが高熱のため溶けてくっついていると述べられている。こうした展示は、モノと人間の身体の一部が一緒になっている実物である。人とモノとがくっついてしまうというおぞましい事態を提示する。これは、モノも人も関係なくなるほどの原爆の威力を示すとともに、被害にあった人の恐れや痛みを喚起させる。また、人間がモノにくっついてしまうという状態の不気味さ、残虐さも印象づける。

次に人的被害・死体の写真展示を見ていくとしよう。S・ソンタグによれば写真は、過去そのものの実体をこちらに突きつけてくるものである（ソンタグ、一九七七＝一九七九）。また、写真から「時を超えて現在の瞬間に投影される喜びや恐怖、つかの間の勝利や惨劇の瞬間に、わたしたちは本能的な感情で反応する」（モリスースズキ、二〇〇四、九五頁）。

原爆資料館に展示されている写真も当時の原爆被害の惨状を時空を超えた過去の実体として人の視覚に訴える。そのため、写真は私たちの感情をやすやすととらえるものとなっている。たとえば「翌日の爆心地付近」（長崎市、一九九六＝二〇〇四、二〇～二一頁）や「浦上駅ホームの母子の遺体」（長崎市、一九九六＝二〇〇四、二六頁）といった展示写真は、原爆の威力の凄まじさ、残虐さを提示している。

しかし展示写真は、残酷さ・残虐さによって感性を刺激するだけではない。残酷さと同時に、「苦痛にたえながら手当ての順番を待つ母子」（長崎市、一九九六＝二〇〇四、三四頁）のように見る者に共感を生むような展示も存在する。こうした親子の写真は、残酷さだ